

病は収穫直前に株が急激に枯れ上がる病害で、根の表皮が黒く変色して見える症状が特徴である。ウリ科、マメ科、キク科、ヒルガオ科など多くの作物に感染するので、発生に伴って他作物へ転換する場合には非宿主作物を選択する。

令和3年は北海道で最近栽培されるようになった作物でも土壌病害が確認された。しょうがは空知地方を中心に栽培導入がすすんでいるが、根茎腐敗病の発生が確認された。対策として発生株やその周辺株をすみやかに抜き取り、ほ場外で適切に処分する。登録のある土壌表面散布剤や灌注剤による防除を行う。種根茎の温湯消毒（51.5℃・10分）などである。

また、道内で栽培が増えてきているかんしょ（サツマイモ）では、全国的に問題となっている基腐病の発生が確認された。対策として発生株及びその周辺株を抜き取り、ほ場外で適切に処分する。ほ場内での拡大を防ぐため、登録のある薬剤の茎葉散布を行うなどである。

根茎腐敗病、基腐病のいずれとも汚染種苗や土壌の移動により侵入したと考えられ、最も大切な対策は「持ち込まないこと」である。健全種苗を用いること、連作を避け、発生ほ場でしょうがやかんしょを再び栽培する場合は土壌消毒を行うことが望ましい。

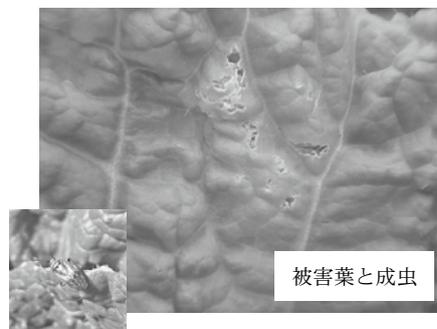
4. 令和3年に新たに発生を認めた病害虫

令和3年に道内で新たに発生を認めた病害虫は20（病害14、害虫6）であった。その一部を抜粋して紹介する。

(1) はくさいのマキバカスミカメ（新寄主）

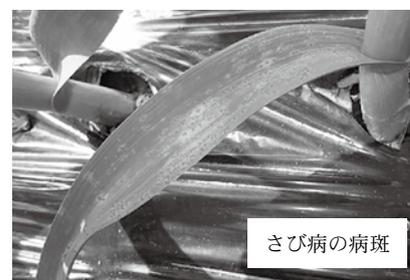
収穫期のはくさいの葉身に1～2mm程度の不定形の穴が点在する症状を生じる。また中肋には褐色の隆起または陥没する症状が発生する。

なお、道内ではとうもろこし、小豆、かぼちゃ、メロン、レタスやねぎなど各種作物への寄生が確認されている。



(2) にんにくのさび病（新発生）

葉に橙色のやや盛り上がった小斑点を生じる症状を示し、この小斑点はやがて表皮が破れ黄橙色の胞子が認められる。病原菌は *Puccinia allii*（パクシニア・アリ）である。



【補足】「特に注意を要する病害虫」および「新発生病害虫」の詳細な情報については、北海道病害虫防除所のホームページに掲載しているで、そちらもご覧いただきたい。

詳しい内容については、次にお問い合わせください。

道総研十勝農業試験場 生産技術グループ

電話（0155）62-2431 E-mail：tokachi-agri@hro.or.jp